

豊中市名誉市民・映画監督



とよなか山田会HP

山田洋次氏に エールを送る

●編集・発行／とよなか山田会 ●代表／武市 進 ●〒561-0894 豊中市勝部1-1-7 TEL／080-3868-2010
●facebook／toyonakayamadakai.com ●メール／info@toyonakayamadakai.com

「特集」

山田洋次監督が 生まれたころの豊中



豊中の古いなかしい道

今となつては廃れてしまつたり、全くイメージが変わつてしまつた街道の数々。能勢街道・鎌倉街道・吹田街道・桜塚街道・勝尾寺街道・箕面道などなど。

山田監督が生まれた頃の豊中には、こうした古いなかしい道を行き交つた人々の哀歓や物流の数々が、いきいきと息づいていたに違いありません。(グラフとよなかNO.19より)

- 伊丹街道
- 西国街道
- 桜塚街道
- 能勢街道
- 吹田街道
- 箕面街道
- 三国街道
- 勝尾寺街道
- 横関街道
- 熊野田街道
- 鎌倉街道

[特集]



「小さいうち」(C)2014 松竹株式会社

●「小さいうち」のモデルとなった山田監督のご生家
豊中市桜塚に現存する山田氏のご生家。建築当時は豊中町の時代で、岡町駅と原田神社、そして能勢街道と伊丹街道の交わる「町場」だった岡町の市場があった。以後東京へ転居、そして父上が南満州鉄道にご勤務だったので満州へ。引き揚げとその後のご苦労は大変だった。築後90年を越えたこの家に現在お住まいの方も、よほど丁寧に維持に気遣いながら住んでおられるに違いない。

●最先端の改造住宅が集まる「住宅改造博覧会」
現在の箕面市桜ヶ丘二丁目です。1922（大正11）年に「住宅改造博覧会」が開催された。この「住宅改造博覧会」は、「日本建築協会」が主催したもので、コンペティションで入選した住宅を中心に、25棟が建設、展示された。博覧会は大盛況で、当初60日間の予定であった会期が延長され、7万人以上の入場者を集めた。博覧会の終了後には展示住宅が土地付きで売り出された。（1923（大正12）年頃）



●今も箕面に建つ今戸家住宅

山田洋次監督が生まれた頃の豊中

「小さいうち」のモデルとなった住宅を巡って

山田洋次監督が生まれたころの豊中

監督は1931年（昭和6年）に生まれ、2歳まで豊中で暮らしておられました。長兄がおられたそうですから、桜塚で現在、立派に残っているご生家は、1925年（昭和元年）頃に建築されたものと想像されます。

監督のお父上は、山田正さんとおっしゃる方。九州大学工学部卒業。大阪此花区にあった汽車製造合資会社で蒸気機関車の設計をしておられました。

折しも、1910年（明治43年）3月、当時の箕面有馬電気鉄道（現阪急電鉄）が豊中を南北に

貫いて敷設され、観光遊覧電車として発足。岡町、服部に新駅が生まれ、続いて同年蛍池駅、翌々年豊中駅が誕生、1914年（大正3年）以後、宝塚沿線住宅開発事業を開始します。
服部から曾根、岡町周辺、玉井町一帯、続いて岡町住宅経営会社によって岡町西方に広大な土地



●有馬箕面電気軌道（岡町駅近く）



●豊中町役場

昭和13年に現在地に移転するまで、現在の岡町図書館の場所にあった。



●昭和10年 本通り豊中駅西口

（シティライフアーカイブズ【北摂の歴史記録】第19回 写真で振り返る豊中市・箕面市・茨木市 より）

経営が実施されました。
当時、豊中は1927年（昭和2年）4月1日に町制を施行して豊中町となり、当時の人口は2300人ほど。豊中市になったのは1936年（昭和11年）。当時、豊中は高燥閑雅な郊外住宅地ということで、お父上はこの地に住むことされたのでしょつ。

映画『小さいうち』のモデルとなったモダン住宅

折から1923年（大正12年）秋、箕面村に「桜丘住宅改造博覧会」が開催され、そのモデルハウスが現在も多数残されています。

博覧会終了後翌年に建てられたこの今戸家住宅（写真右）のオレンジ色の塩焼き瓦を葺いた急勾配の屋根が特徴的。こうした住宅を山田氏はモデルとされたのではないかと伝えられています。監督ご自身も「父は映画『小さいうち』に出てくるような三角屋根のモダンな家を設計して建てました」と述べておられます。

やがてご勤務のご都合で、東京へ移住されることになり、折角のお住まいを売却されたものと思われる。

映画『小さいうち』は、昭和10年代から敗戦、現代までを描いた映画です。舞台となったのは生家と似た赤い屋根を持つ家。この「小さいうち」の中では、様々な物語や事件が起こるのですが、第二次世界大戦中、空襲によって焼けてしまっています。この家は市民の日々の暮らしの舞台であり、その家が無残に焼けてしまうこと、また、登場人物が全て戦争の犠牲となって物語が終わることで、戦争の悲惨さを端的に表現しているのではないのでしょうか。（編集部）

●昭和初期の岡町停留場

昭和初年の岡町駅西口で、まだ豊中村であった。駅の西方には大正四年以来、住宅が増加しつつあった。村役場、郵便局、小学校は駅西側に集まっていた。東側は駅に接して原田神社神域であり、その北鳥居前を南北に能勢街道に沿って、江戸時代からの商店があった。昭和初年東西に改札口があったのはいずれもその西側に住宅の発展したこの岡町と豊中の二駅だけであった。
〔ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 豊中〕(株)国書刊行会 昭和55年より)



●旧岡町商店街

原田神社の社地をつらぬいて能勢街道が通っていた。寛文（17世紀後半）のころ岡山村（曾根東町）から願い出て、この道沿いに商家をつくった。やがて戸数が増して、市域内における江戸時代以来、ただ一つの町家形態の地となった。従って明治期には計祥や銀行などの公共施設、金融機関が集まっていた。昭和8年、この東方に府道池田線が開通した。



●昭和13年頃の豊中駅前

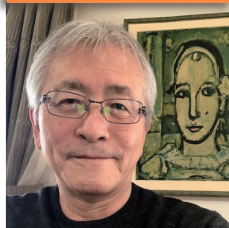
箕面有馬電気軌道（現・阪急電鉄宝塚線）の「豊中駅」が1913年開設。駅前には1930（昭和5）年、「阪急豊中市場」が開設された。その周辺に商店街が形成されていった。（『今昔写真』より）



逸郎の映画三昧

山田洋次監督の映画を観る④

田中逸郎



●元・豊中市副市長
NPO政策研究所理事

一歩、前へ。決断する女性たち

これまでの3回の映画評で、山田洋次監督は笑いが持つ解放的な力をもとに、観客の胸の中の燠（おき）に火をつける、つまり私たちが見失いつつある大切なことを届けてくれていると述べてきた。これら喜劇作品の共通点は、「男はつらいよ」などと愚痴をこぼす能天気な男たちに巻き込まれながらも生き抜く女性の姿を描いていることにある。

これは喜劇作品に限らず、実はあらゆる作品に通底しているカタチではないか。ストーリーはそれぞれ違いますが、どの作品においても喜びも悲しみも困難も引き受けて生きる女性の人生が描かれている。すべての作品の、監督にとっての本当の主人公は「女性」である……この勝手に荒っぽい切り口から、監督の女性像と作品の魅力を解き明かしてみたい。

『小さいうち』（2014年作品）

最初に取り上げるのは『小さいうち』。ベルリン国際映画祭で、黒木華さんが女優賞（銀熊賞）を獲得している。受賞時の記者会見で、監督は「戦争中の生活を今の人たちに伝えたかった。今の日本の指導者は戦争を知らない世代。悲劇的な戦争の教訓を学んで生きているのか、心配でならない」（2014年2月18日、朝日新聞夕刊より）と述べている。

物語は、戦前の東京山の手の小さなお家に奉公した女中の目を通して若奥様の不倫を描いたもので、監督は戦中・戦後の時代を、下級武士の貧しい暮らしを続ける清兵衛が、初恋の身分違いの朋江への理不尽な仕打ちを止めようとしたことから、剣の使い手であることが発覚。藩家老の命で、権力に逆らう剣豪と決闘する物語である。時は江戸末期。平侍（いわばノンキャリアの地方公務員）の清兵衛には、日々つつましい暮らしがあるだけ。上司に取り入って（今はやりの言葉でいえば「忖度」して）出世しようという欲はないのだが、放っておいてはくれない。非情な命令が下る。権力に反抗する輩を殺せ、そうすれば出世させてやろう。もし死んだ場合には、家族の面倒は見てやる、と。

『たそがれ清兵衛』（2002年作品）
大好きな作品である。『小さいうち』は名実ともに女性が主人公の作品だが、この作品は剣豪が主人公。筆者はまさに一刀両断にされた。衝撃とカタルシスを伝えよう。

「たそがれ清兵衛」(C)2002 松竹株式会社



死んだ場合には、家族の面倒は見てやる、と。一つの時代もそうだ。権力と支配の綱の目は暮らしを根こそぎ奪おうとする。クライマックスの決闘シーンに登場する剣豪もそうだった。ようや

時下を生きる女性たちの暮らしを淡々と描いていく。戦況が悪化し閉塞状況がますます厳しくなっていくなか、良妻賢母として暮らしている若奥様が、ある出来事をきっかけに道ならぬ恋に身を焦がす。が、召集される恋人との最後の逢瀬もかなわぬまま、空襲で小さなお家ごと焼け死ぬ。若奥様にかわいがられ懸命に奉公するまた少女の面影を残す女中は、若奥様の恋に気づく。誰にも知られないように気づかないながらも、最後の逢瀬がかなわぬように仕向ける。迷いに迷った末にこの決断をした女中は田舎に帰り生き延びる、これらすべての出来事を胸に秘めたまま。

「小さいうち」(C)2014 松竹株式会社



く手に入れたキャリアや官僚の地位がお家騒動で傍流に追いやられ、切腹を命じられた侍である。清兵衛もこの剣豪も、どちらも時代や権力に翻弄される存在。息をのむ長尺の決闘シーンで、それが実に見事に浮かび上がる。これまでの剣客ものにはなかった、殺し合いの実相とその背景が描かれている。かろうじて勝った清兵衛が家に戻ってきたとき、思ってもみなかった奇跡が立ち現れる。初恋の朋江が、地位も家も捨てて寄り添うことを決意して待っていたのだ……。

おなごはんはつまんねえの

そう、もう一つのテーマは「愛」。無償の愛が描かれている。米びつの底が見える貧しい暮らしの中、清兵衛は、やがて武士中心の男社会は終わる、これからは「考える力」を身に着けることで生きていけると二人娘を寺小屋に通わせている。初恋の朋江は、越えられない身分や慣習に傷つき苦しみ「おなごはんはつまんねえの」とつぶやきながらも、最後には未来へと自分を押し出す。二人の娘は、こうした大人たちの決断と無償の愛に育まれ、新しい時代へと向かう。

まさに監督の真骨頂、一歩前へ踏み出し解放へと向かう女性の姿が描かれている。自己保身や権力争い、高邁な理想を論じ争う男たちの独りよがりなふるまいに巻き込まれながらも、自身の人生を自身で前へ押し出し、歩み始めるのである。

お分かりいただけただろうか。冒頭で、監督に2023年8月24日に豊中で先行上映された『こんにちは母さん』もそうだった。恋する母親の決断と顛末を描いた作品だが、最後には「母さんの出番だね」と言っていて、家庭も仕事も失った息子を励ます。監督は、困難を引き受けて生きる（生きざるを得ない）女性の人生を描くことで、社会の矛盾や課題を提起し、私たちへ警鐘を鳴らし続けているのである。

長く生きすぎたの…死者とともに生きる

時代は現代へと移る。戦争を生き延び、年老いた一人暮らしの元女中は、孫から自分史を書くよう勧められる。悩んだ末、誰にも言わず胸に秘めてきたことをついに書き始める。許されない恋に踏み出した若奥様と最後の逢瀬をかなわぬようにした私。この出来事は生きていた限り忘れ去ることはできない。封印できず、今も私は死んでいった人とともにいる、と。「私は長く生きすぎたの」と慟哭しながら……。

監督は、天下国家を声高に語る男たちの立場からではなく、市井で生きてきた女性の人生をそつと差し出すことで、暮らしを根こそぎ奪い、魂を傷つける戦争の実相を描いた。そして、戦争体験は今日も明日も続く進行形の苦しみ、過去の悲惨な出来事と括弧することはできないのだと訴えている。監督から観客にボールが投げられた。この思いを、戦争を知らない世代へのメッセージをキャッチし、二度と戦争を起こしてはならないという決意を、私たちが持続する志として受け継いでいくことが求められているのだ。

モデルとなった監督の生家

映画の本筋から少し離れるが、豊中にも6回空襲があり、たくさんの方々が被害にあっている。しかも敗戦後、現伊丹空港は連合軍が駐留する軍用基地となり、空港周辺は、嘉手納米軍基地がある「サ」（現・沖繩市）のように基地の門前町となった。戦争は、そして戦争がもたらしたその後の苦しみは、豊中のまちにも暮らしにもあったことを決して忘れてはならない。そこから、今をどう生きるか、未来をどう拓くかを考える。この作品から学ぶことは本当に多いのではないかと。もう一つ。舞台である「小さいうち」のモデルとなったのは、豊中市内にある山田洋次監督の生家だといわれて

いつだって別れや死は不意にやってくる。この誰も逃れられない存在のはかなさを受け止めつつ、私たちはどう生きるのか。それを問い続けてきた監督の表現活動の源泉に「女性」がいるとするのは、あながち間違ではないだろう。

終わりに、表現のランニングパス

今回取り上げた作品には原作（小説）がある。原作の何が、どこが、監督の表現活動の源泉に届き響いたのだろうか。作品によって動機やモチーフは違っていたろうが、それを探るために原作を読むことがある。逆に、原作を読んで感動し、映画化されたので観にくくというケースもある。原作の方がよかった、映画の方がよかったと、感想を述べ合っ私たち鑑賞者は気楽なものだが、表現する側は真剣勝負、丁々発止やり合って時間をかけてシナリオに仕上げている。このプロセスを経るすばらしい映画が生まれるのだが、その時点でもう原作とは違うもの。それぞれ別の作品ととらえるべきだろう。

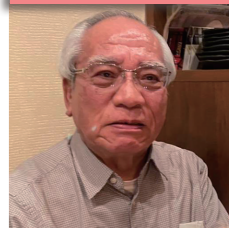
その好事例があるので紹介し、4回シリーズの締めくくりにしたい。小説『キネマの神様』を原作として映画『キネマの神様』が誕生、今度は映画『キネマの神様』を原作として小説『お帰りキネマの神様』が誕生という、前代未聞の連続・連携による表現活動である（文春文庫『お帰りキネマの神様』2023年11月発行、参照）。まるでアスリート同士のランニングパスのように見事に決まり、それぞれ結晶化させていき次の作品が生まれている。原作者（原田マハ）と監督（山田洋次）による大胆で刺激的な、なりよりも幸せな協働活動なので紹介した。

願わくは、表現者と鑑賞者の間においても、小さくてもいい、何かこうした協働関係を構築したい。」とみな山田会」はそのためにあるのではないかと、皆様にご挨拶を贈り、4回にわたる映画評を閉幕します。ありがとうございました。

大阪天満宮

地車囃子ものがたり

林昇



林昇さん
●1943年生まれ
電気部品工場へ就職。以後、自動制御装置に絞って事業従事。会社役員。
退職後、ピアノ演奏を趣味として過ごす。

長柄地区（大阪市北区）の地車囃子を演奏する

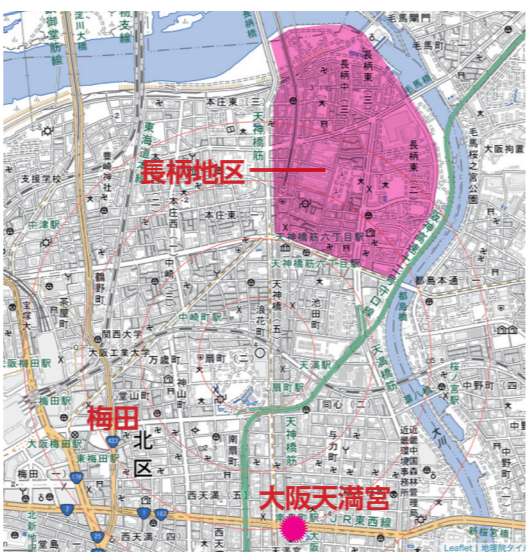
「はりげん連」に参加。天神祭で演奏する

一九六〇年代のこと。私は長柄の淀川天神（よどがわあまつかみ）神社、長柄八幡宮（ながらはちまんぐう）神社界隈の青年団で、天満天神さん（大阪天満宮の愛称）の地車囃子（だんじりばやし）を指導しておられた「はりげん連」の茂刈さんとおっしゃる方の連に参加しました。

茂刈さんは当時相当のお歳でしたが、「ご本業は「しんし張り屋さん（洗濯した布や染めた布帛（ふはく）を、伸子を使ってしわをのびし乾かす）」で、「はりげん」という屋号で御盛業でした。よくできたお方で、ご指導のお陰で、音曲好きだったボクは、やがてその中心の一人となりました。

茂刈さんに連れられて、中央市場の船渡御「鯛船」で何度も演奏、お初天神、服部天神、野里住吉神社など、

「はりげん連」の地車囃子（西淀川区 野里住吉神社夏祭り（2019.8.17）



大阪市北区長柄（ながら）地区
長柄（ながら）は、大阪府大阪市北区の北東部に位置する地区。長柄西・長柄中・長柄東の3地域からなる。

天神祭の地車囃子

今では岸和田の華麗な地車が有名ですが、あの天満宮独特の太鼓と鉦の鳴り響く高音多彩な連打の感動は、八十歳を迎えた今も忘れることはできないのです。

地車囃子（だんじりばやし）は、地車はないが坐って行なう（へたりと呼ぶ）親太鼓・雄鉦・雌鉦・小太鼓の四人一組の演奏です。親太鼓はビヤ樽型の彫り抜き胴体。鉦はたらしい型の青銅器。小太鼓は親太鼓の二

名人と呼ばれた林榮さんの親太鼓（YouTube より）



回り小さい。

中でも親太鼓の派手なバチさばきは、最も即興性が許される花形で、メンを打つだけでなく、胴を打ち鉦を打ち、さらに胴の田周を滑らせて連打、さらに腕を交差させて円周連打、さらに回転打ち。

お陰で80年代から90年代にかけて長柄八幡宮、南長柄八幡宮の「キタ」の華麗さを取り入れた講や連がつぎつぎと生まれました。

曲は、ハナ・ナカ・ダメの三楽章で構成され、「チキチンチキチンチキチンコン」と聞こえてくるのが「イチリキ」、「コンコンコンチキチンコン」、「コンコンチキチンコン」と聞こえてくるのが「ニリキ」で、「チキチンチキチンチキチン」と聞こえてくるのが「ちゃんぎ」。

これらの曲調はすべて、楽譜がありませんので、それぞれが自分の耳で聞いて記憶し、それを伝承していくのです。

地車囃子には流派があります。私らの長柄地区の地車囃子は、はじめは天満宮の境内で、蒲生今福地区の地車囃子と共演していました。のちに天満宮境内で「ヒガシ」と称して奉納。これに対して、長柄地区が「キタ」と称し、船渡御鯛船で地車囃子を奉納するようになりました（今はコースが変わっていますが）。

それぞれ踊り・バチさばき・テンポ、曲の変わり目のサインなどに若干の差異があります。別に福島で二シという組も生まれます。

有名な手打ち。ご祝儀を頂いたときなどに手打ちを行ないます。

地車の、ほとんどは「大阪締め」と呼ばれる、うちまじ・ちまじよ・ドンドン、もひとつせ・ドンドン、祝うて三度・どんどんがとん。

地車同士が陸や船ですれ違ふときは、うちまーひよ・どんどん、もひとつせーい・ドンドン、よいとき・どんすつんとんと、一般向けと地車向け用の手打ちがあります。

ほくらが若い頃一生懸命取り組んできた伝統芸能がいまも若い人たちによって盛んになり、一層隆盛しているのを見ると、嬉しくたまらないですね。

地車囃子

地車（だんじり・だんぢり）は、神社の祭礼で用いられる屋台・「山車」の一種。近畿地方の泉州・河内・摂津などの地域を中心に、近畿の広域で見ることができる。

地車囃子（だんじり／だんぢりばやし）には摂河泉三地域それぞれの味があり、様々に評価される。泉州地域では主に小太鼓・大太鼓・鉦・笛などを用いる。河内地域では主に大太鼓・小太鼓・鉦に加え、曳き唄のマイクも用いる（南河内地域に限る）。摂津地域では主に親太鼓・子太鼓・鉦（2丁で演ずる場合は双盤といひ雄鉦・雌鉦となる。）などを用い、尼崎では釣り鐘型の半鐘を用いる地域もある。

大阪市北部には、戦争・戦乱等により焼失、あるいは資金的な問題等によって地車が消滅し、地車囃子のみ残存している地区がある。これらの地区にあたる（北）長柄・南長柄等では地車囃子が地車の曳行と独立して伝承されていき、平野郷地域、十三地域や東大阪地域などの一部には、長柄・南長柄地区の伝統的地車囃子を取り入れている講が少なくはない。

天満・長柄を起源とした大阪流地車囃子は郷土芸能としても発展し、天神囃子とも呼ばれるようになる。そして愛好会が結成され、イベント会場で囃子を披露するセミプロのパフォーマーも存在する。

天神祭

大阪天満宮が鎮座した2年後の951年より始まったとされ、東京・神田祭、京都・祇園祭とともに日本三大祭りの一つに数えられている。全国各地で行われる「天神祭」の中でも最も有名な天神祭でもある。

大阪市内の天満にある大阪天満宮の氏地を中心に、毎年6月下旬吉日～7月25日に行われ、特に宵宮と本宮に当たる7月24日・25日は賑やか。25日には約5,000発もの奉納花火と、100隻もの大船団が大川に浮かぶ。



私の寅さん

村上弘子



村上弘子さん

●1946（昭和21）年生まれ
 京都女子大短期大学部 初等教育科卒業
 小学校教諭として40年間勤務 その後学童保育所支援員として10年間勤務
 民生委員12年・自治会・認知症サポーター養成講座委員 等 継続中

「山田洋次氏にエールを送る」の編集者、西井弘和が私の「寅さん」

私の寅さん。「どこボラはっぴいニュース」とよなかの星たち」「ヨロヨロゲンキ通信」「山田洋次氏にエールを送る」の編集者。また、学研の文学賞を得た沢良木和生。その他その他。まあようも次から次へと楽しいことを精力的に切り拓いていく男です。

近年は医者泣かせのクライアント。あまりの根性に医者には「余命を言ったかな……？」と首を傾げ、『根性の塊』の標本にしたいと『呆れているとか、いないとか。そして、落語家、桂二葉のおじいちゃん

そして、落語家、桂二葉のおじいちゃん
 そしてそして、桂二葉のじいちゃんなんです。日本で唯一の演芸専門誌「東京かわら版」／『NHK新人落語大賞を女性で初めて、しかも満点で受賞し、演芸界に彗星の如く現れた新しきヒーロー』。



「アエラ」／「一挙にブレイクしたのは50年超の歴史で初めての女性だったから。二葉の熱き落語愛、どうぞお見知り置きのほどを」。

「神戸新聞」／『飛ぶ鳥を落とす勢いの落語家』。

これが桂二葉で、「私根性だけはえげつないんで、もともと不良気質なところがあるんです」と言ってます。そ

やで！ 二葉のオカンの結婚披露パーティで、袴の股立ちとって深紅のたすきを掛け、蛸声張り上げて四股を踏んで、無手勝流ですわ。フツーやらんでしょ、花嫁の父がア。それができるんです。心情の爆発ささいでか！

「らしく」やりぬくホンマモン！

昔、西井さんから「孫が落語家になるいうてんねん」と聞きました。何年か後、知人の学童保育所主催の落語会が阪急八甲駅界隈の会場で開催されました。子どもたちも沢山いました。彼女はピンクの着物でアフロヘア。出てきただけで、ウワー！ 第一声の黄色い声で、エエー。「つる」で大笑いでした。



この十月、神戸喜楽館「繁昌亭大賞受賞3DAYS」で、彼女はトリでした。初日の演目は上方落語の大ネタ「らくだ」。一時間ぶつつづけの大作。自分の言葉で、まっすぐに声が出て、間がよくテンポよく、そして聞きやすく、館内にビーンと清々しい「二葉のらくだ」が行き渡りました。

私の「寅さん」の孫やもの、80歳になっても高座に上がっているでしょう。



編集後記

- 気軽なご投稿を、下記編集部までお送りください。文字数500～800字。氏名年齢職業明記。編集等はお任せ願います。
- 次号発行は、×月10日です。ご投稿は×月30日までをお願いいたします。お気軽にどうぞ。

●編集部／西井弘和
 〒561-0865 豊中市旭丘1-4-303
 ☎06-6843-6700
 メール／h-nishi77-100@ab.auone-net.jp